

ふるさと歴史館 第44回企画展

むかし ばなし

ほ

石岡の昔話を掘る 其ノ二

— 出役！昔話の妖怪たち —



茨城童子がやってきて食べられてしまうよ…

紙芝居絵『龍神山の鬼-茨城童子-』より



性悪る狐め！かならず見つけてやっからな…

紙芝居絵『新池の性悪る狐』より

令和8年 **4月8日**(水)～**7月5日**(日)

◆展示解説

4月18日(土) **10時30分**から

申し込み不要。直接ふるさと歴史館にお集まりください。

入館無料

開館時間 10:00～16:30

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内 電話 0299-23-2398

石岡の昔話を掘る其ノ二

— 出没！昔話の妖怪たち —

■目次

龍神山の鬼—茨城童子—	2
東大橋の雷棒	3
長楽寺の天狗	4
小倉川の河童とカアピタリ餅	5
新池の性悪る狐	6

■例言

本冊子は、令和8(2026)年4月8日～7月5日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第44回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課(飯塚 信久)が行いました。

あらすじ

今から千年以上も前のお話です。人々から「茨城童子」と呼ばれている暴れん坊の鬼が、この龍神山にやってきました。茨城童子は、京の都を荒らしまわっている丹波大江山の酒呑童子の子分で、各地の山々を転々としながら、村々を荒らしまわっていました。

龍神山にやってきた茨城童子は、夜になると**大きな巾着袋(きんちゃくぶくろ)**をさげて、村に下りてきては人をさらい、その**巾着袋**に閉じ込めて、大きな四角い石にあいている丸い穴から、太い縄を通した「根締(ねじめ)」で袋をふさぎ、山に帰っていくのでした。さらわれた人はみんな帰って来ないので、きっと鬼に食べられてしまったのだと恐れられていました。

それからというもの、村人たちは、夜になるとみんな外に出なくなりました。また、親の言うことをきかない子供には

「そんなわがままな子供では、茨城童子がやってきて、食べられてしまうよ。」

という、どの子供もおとなしく親の言うことを聞いたといいます。

そんなある日のこと、京の都から来た商人(あきんど)が
—大江山の酒呑童子が、源頼光(みなもとのよりみつ)や渡辺綱(わたなべのつな)などのとても強い侍たちに退治された—

という話を聞かせてくれました。さらに、この地にもその侍たちが鬼退治にやってくるとの便りも入ってきました。

これを聞いた茨城童子は

「親分の酒呑童子がやられたのではとてもかなわない……」

と、大きな体をぶるぶるゆさぶり震えあがってしまいました。そして、大慌てで、邪魔になった腰にさげていた巾着袋を放り投げ、近くの三角山を越えて逃げていってしまいました。

昔話『龍神山の鬼』の舞台

石岡市街地から約4キロ柿岡街道を進むと、龍神山がそびえ、そのふもとに村上地区と染谷地区があります。この2つの地区にはそれぞれ龍神宮(村上佐志能神社、染谷佐志能神社)が鎮座しています。以前は日照りが続き、干ばつになると、近隣の村々からお参りに訪れました。その後に神社の湧水を汲んで、自分たちの村の神棚にお供えして祈りをささげると、その村には雨が降るといわれていました。

また、龍神山の西側には、茨城童子がひとまたぎに飛び越えて逃げていったとされる「三角山」、別名「鬼越え山」という名称の山を眺めることができます。



▲ 現在の三角山(鬼越え山)



▲ 現在の鬼越え峠



▲ 万福寺の畑に埋まっている「きんちゃく石」

茨城童子が逃げていくときに放り投げた巾着袋の「根締(ねじめ)」の四角い石は、遠くまで飛ばされて、茨城台の万福寺の西側にある畑まで届き、その弾みで畑にのめり込んでしまったといわれています。現在、「きんちゃく石」と呼ばれている石は、四方1.1mの立方体で、紐を通したとされる穴の直径が47cmあります。

東大橋の雷棒 ひがしおおはしのかみなりぼう

あらすじ

むかしむかし、たいそういたずら好きな「かみなり小僧」がいました。かみなり小僧は、雲の上から人間の住む下界を眺めるのが大好きでした。

ある日、かみなり小僧は、いつものように入道雲に乗って散歩に出かけました。そのとき、うっかり、持っていた太鼓を叩いて大きな音を出してしまいました。すると、雲の間からゴロゴロと大きな音がしたため、地上の人間たちが慌てていっせいに走り出しました。かみなり小僧は、地上で何が起きたのかわかりませんでした。人間たちが太鼓の音に驚いて逃げまどっていることに気づくと、今度は力いっぱい太鼓をたたき始めました。

ードンドン！ドドン！ゴロゴロゴロ！ー

すると、人間たちが右へ左へと面白いように逃げ回るので、かみなり小僧は太鼓を叩くことに夢中になり、雲から身を乗り出しすぎて地上に真っ逆さまに落ちてしまいました。

ーまずい……人間に気づかれてしまうぞ、すぐに空に駆け上らなきゃ……ー

と、慌てたかみなり小僧は、太鼓を叩く「石のバチ」を地上に置き忘れてしまったのです。

それからしばらくして、草むらで遊んでいた子どもが、大きく穴があいている場所から、不思議な「石の棒」を見つけました。その「石の棒」は、重すぎて自分ひとりでは動かせないで親を呼びに行きました。やがて話を聞きつけた村の人たちも集まってきました。しかし、それがなんの棒なのか見当もつきません。「これは……もしかして……らいさま(かみなりさま)が太鼓を叩くバチではねえのけ。」

「んん、そうかもしんねえな。」

という話に落ち着きました。それ以来、この「石の棒」は、「雷棒(かみなりぼう)」とよばれるようになったそうです。*「雷棒」と呼ばれている石は「**石棒(せきぼう)**」のことで石岡市内の遺跡からも出土しています。

「東大橋の雷棒」の舞台

石岡市街の東部を流れる園部川の右側の岸には、緩やかな台地が広がっている場所に東大橋原地区があります。この場所は、「東大橋原遺跡」として、縄文時代の遺構のほかに古墳時代や奈良時代から平安時代の竪穴住居も確認されています。現在、東幼稚園敷地跡には、東大橋原遺跡の案内板が建てられています。

また、石岡市内の遺跡からは、「石棒」も出土されています。石棒は、石を棒状に加工したもので、石岡で出土した石棒は、長さ30cmから1mほどのものがあります。石棒の出土状態から、儀礼的なものとして祭られ、崇拝されていたと考えられています。

雷神の怒り？ 雷雲の被害

雷雲がもたらす災害には、強雨と落雷の他に降雹・竜巻などがあります。しかし、これらは非常に局地的な現象で、場所によって被害の影響がはっきりと分かります。雹は、夏の発達した積乱雲の中で発生する5ミリ以上の氷の塊で、農作物や人畜に被害を与えます。こうした自然災害もまた、悪霊や鬼などがもたらすと考えられ、関東各地で「雹嵐除け」などの行事が行われてきました。

石岡でも雹による被害で、桑の葉やたばこの葉に穴があいたり、ちぎれたりするなどの損傷を引き起こします。発生するのは5月から8月上旬にかけての時期で、ちょうど多くの作物の生育期にあたります。

近年では果樹、野菜、ビニールハウスの被害が目立っています。茨城県での農業被害の発生件数で最も多いのは雹害になっています。特に雹が降る時期や大きさによっては、かなり収穫量や品質に影響が出てしまいます。



▲ 東大橋原遺跡



▲ 初夏 たばこ畑雷雹の被害 昭和初期
『今泉義文昭和写真』より石岡市立中央図書館蔵

長楽寺の天狗 ちょうらくじのてんぐ

あらすじ

いつの頃かは定かではありませんが、そう古い時代の話でもありません。足尾山のふもとにある猪内(むじなうち)の長楽寺の近くに、年老いた母親とその息子が住んでいました。息子は、はたらき者で親孝行でしたが、夜になると母親の心配をよそに、修行のためといて、近くの足尾山や加波山のほうまで困難な道を歩き回っていました。

ある夏の晩のことでした。母親がふと

「明日は津島の祇園祭だな…日本一だという津島の祇園祭を一生の思い出に見物してみたいのう…」

と、冗談まじりに言いました。息子は、しばらく考えていましたが

「お母さん、津島はそう遠くはないよ。今から出かければ、夜明けの頃までには着くから行きましょう。」

と、すぐに行くことになりました。津島の祇園祭は現在の愛知県津島市のお祭りのことです。

若者は、白い衣を着て母親を背負い、目がまわると困るからといて、母親に手拭いで目隠しをして出かけました。母親は、息子がからかい半分に、その辺を歩くだけぐらいにしか考えず、背中にしがみついているうちに眠ってしまい、何もわからなくなってしまいました…

「さあ着いたぞ。」

と、息子がいうので、眼をさました母親は、眼の前の光景に驚きました。今まで話にはきいていても、見たことがない広い海、浜辺に集まっている何十隻とも知れぬ船が、色とりどりの旗をひるがえし、勇ましい笛や太鼓のお囃子、それを見物する人たちが浜に群れ、そのにぎやかなこと、母親には、まるで夢のような一日が過ぎました。

その日の暮れ、母親は、また目隠しをされて息子の背中に乗りましたが、いつの間にか眠ってしまい、どこをどう帰ったかわかりませんでした。気がつくと、朝日のさす自分の家にいました。

息子もさすがに疲れたと見え

「お母さん、わしは今日一日ゆっくり寝るから部屋へは決して来ないでくれ。」

と、奥の部屋に入り、夕方になっても起きてはきませんでした。心配した母親は、来てはいけないと言われた奥の部屋をそっと開けてみると驚きました。大の字になって高いびきをかいている息子の肩から、大きな羽が広がり、天狗そのままの姿で寝ていました。息子は、がぼっと起き上がって、腰を抜かしている母親に

「お母さん、あれほどいったのに見てしまいましたね。もうお目にかかりません。」

と、言うより早く見えなくなってしまいました。

はたらき者で親孝行の息子は、天狗になって岩間の愛宕山に行ってしまいました。

「長楽寺の天狗」の舞台

長楽寺のある猪内(龍明)集落は、葦穂地区の北側に位置し、足尾山中腹の山中にあります。長楽寺は、現在も本堂・仁王門が残り、江戸時代の山寺としては、本格的な建築様式になっています。本尊の薬師如来坐像や十二神像など室町時代から江戸時代初期の仏像といわれ、地元では「お薬師様」と呼んで秘仏であったといえます。

お薬師様の長楽寺 ➤



天狗に祈る 天狗に守られる

天狗は山の守護神とされ、山を神聖視する人々からは畏怖されています。その半面、天狗は人々を救ってくれる山岳信仰の影響から、村人と交流したという説話が多く、天狗が残していったという品も各地に存在しています。

長楽寺境内には、天狗をおまつりしている「飯綱祠いづなぼこら (天狗社)てんぐのやしろ」が鎮座しており、一本歯の天狗の高下駄などが奉納されています。

天狗の高下駄が奉納された飯綱祠(天狗社) 昭和初期 ➤

『今泉義文昭和写真』より石岡市立中央図書館蔵



あらすじ

筑波山の東側にある峰寺山のふもと、吉生から流れ始める小倉川は、柿岡のはずれで恋瀬川に合流します。

夏になると、小倉橋近くにある集落の子どもたちは、ザルを持って小倉川に飛び込んでいき、どじょっこだのふなっこ捕りを始めます。その様子を、少し離れた川の草むらの中にひそんでいた黒いモノが、ギョロリと目玉だけ出して、じっと見つめていました。

子どもたちは、家に帰るための片づけをして川を後にしましたが、いちばん歳の小さい子どもだけは、魚を捕るために川の中で草むらをかき回していました。そのとき、ぬるっとしたものが、子どもの足をつかみました。三尺(約90センチ)くらいの黒いモノが、肩まで伸びた濡れた髪の毛を振り乱しながら、子どもの足をひっぱり始めました。子どもは泣きながらも大声で叫び続けていると、突然、黒いモノは、サァーと、川の中にもぐってしまいました。帰って来ない弟を心配した兄が、川に戻ってきてみると、川の草むらの中に尻もちをついている弟を見つけ、川から引き上げると、泣きじゃくっている弟をしっかりと抱きかかえて家に帰りました。

師走の朔日(12月1日)、集落の家々では朝早くから餅つきを始めました。毎年この日には水神様にお供えする『カピタリ餅』をこしらえます。『カピタリ餅』とは、『川浸り餅』がなまった言葉です。兄は、この『カピタリ餅』を川の中に投げ込めば、河童は人間にいたずらをしなくなることを弟に話しました。

兄と弟たちは、出来上がった『カピタリ餅』を半紙に包んで、まず最初に田んぼのそばにある水神様の祠にお供えをして、河童が悪さをしないように祈りました。その後、河童に捧げる『カピタリ餅』を、それぞれ2個ずつ小倉川に投げ込みました。

餅を川に投げ込んだ後、川の中にお尻を浸します。これは、河童に「*尻子玉」を差し出すまねをする意味があるといえます。*尻子玉とは肛門にあるといわれている玉のこと

また、投げ込んだ『カピタリ餅』に塗ってある「あんこ」がなくなっていれば、河童が願いを聞いてくれたことになるといわれています。

「小倉川の河童とカピタリ餅」の舞台

山根盆地(八郷盆地)の中央に位置する柿岡地区の東側を、恋瀬川が迂回して流れています。北側からは上曾集落から流れ出る小川、南側からは吉生地区から流れ出る小倉川が柿岡地区のはずれで恋瀬川に合流します。

多くの川に挟まれた柿岡地区は、国府と筑波・真壁を結ぶ街道の宿場として栄えてきました。また川を利用して河岸も開かれ、この地域における物資集散地の中心でした。

水神様、河童への供物 カピタリ餅

昭和30年代頃まで、恋瀬川流域の集落では、12月1日の早朝に『カピタリ餅(川浸り餅)』と呼ばれる、**うるち米を丸餅にして上面にあんこをちよんとつけた餅**を作っていました。(復元模型参照) 子供たちは家を出て、水神様の祠にカピタリ餅をお供えしてから最初に渡る橋まで行き、2~3個の餅を投げ込みました。

この風習は、**カピタリ餅を水神様と河童に捧げることで、子どもたちが水の事故に遭わないようにと、水難除けの祈願**として行われていたものです。

恋瀬川の水遊び 大正12年 >
『石岡の歴史写真』より石岡市立中央図書館蔵



柿岡まちのにぎわい 昭和初期
『今泉義文昭和写真』より石岡市立中央図書館蔵



新池の性悪る狐 しんいけのしょうわるきつね

あらすじ

* 性悪るとは、性格や根性が悪いことをいいます。

まだ電気がなかった時代、石岡の町から小川の町につながる道は、両側が松林で、人通りが少ない淋しいところだったそうです。兵崎あたりをしばらく東に進んで行くと、新池(しんいけ)という池がありました。ここには狐が棲んでいて、山道や池の周りを通る人たちを化かしては村人を困らせていました。

ある夜遅くに、町の魚屋で買った魚の入った桶を担いだ村人がこの池まで歩いてきました。突然、バサッと音がしてあかりが消えてしまいました。村人は真っ暗闇の中で、消えたらうそくに灯をつけ家に向かって歩き出しました。が、いくら歩かないうちに、また、バサッと提灯をたたかれたような音がして、灯が消えてしまいました。何度も同じことを繰り返しながら、村人はやっとの思いで家にたどり着きました。やれやれと、玄関先に腰を下ろして桶を見ると、魚の入っている桶の中は空っぽになっていました。これは、新池に棲む狐のしわざでした。狐は、しっぽで提灯の火をたたき消して、村人がろうそくに火をつける間をねらって、魚をとって食べ、食べ終わるとまた火を消して魚を奪い取って食べる、ということを繰り返していたのです。

また、ある晩のこと、狐は茶屋の女に化けて、夜遊びに行く村人に声をかけ、あかりのついている入口にさそい、のれんをくぐらせると…ドボンと水の中に…腰まで池の水に浸かった村人は、まわりを見回しましたが、茶屋などはどこにもありませんでした。別の村人は、志筑に住む妹の家に急に用事があって夜道を急いでいる途中、若い女性が現れて、途中まで一緒に連れていってくれと声をかけられたので、同情して一緒に道を急ぎました。ずいぶん歩いたと思ったとき、妹の家が見えたので、村人はそこで女性と別れ、妹の家に足を踏み入れたとたん…ドボンと水の中に…気が付くと、そこには家など何もありません。村人は池の中に落ちてしまったのです。

このように何人かの村人が、狐のせいで池におぼれそうになりました。残念なことに命を落とした村人も出てしまいました。村人は性悪る狐を退治することに決め、3人の猟師たちに狐退治を頼みました。しかし、いくら探しても狐を見つけることができません。猟師たちは一日中、池の山の中を歩き回りました。狐は上手に隠れているので見つかることはありませんでした。猟師たちはひと息抜こうと腰を下ろすと、眠くなって寝てしまいました。松の木に登って隠れていた狐は猟師たちが眠ったのを確かめると、木から下りてどこかに逃げ去ってしまいました。それ以来、狐のいたずらはなくなりました。

狐のせいで尊い命を落とした泥深い池を、誰いともなく「死に池」と呼んでいましたが、「死に池」では縁起が悪いので「新池」と呼び方を変えたということです。

「新池の性悪る狐」の舞台

兵崎地区から関鉄バス専用レーンに沿って東に進むと新池台の「フローラルシティ南台」の住宅地が広がっています。現在でも、三方を雑木林に囲まれた場所があり、かつては「死に池」と呼ばれた「新池」が、わずかばかり残っています。この池周辺に狐が棲んでいて、淋しい山道や池のほりを通る人たちをよく化かして困らせていたといえます。なかにはだまされて、池でおぼれて死んだ人もいたといえます。それで「死に池」と呼ぶようになったといえます。時が過ぎて「死に池」では縁起が悪いということから「新池」と名前を変えたといえます。



現在の「新池」の様子

狐が人を化かす【化け狐、あるいは野狐(やこ)】

日本では、人間に対して悪事やいたずらをする狐のことを「野狐」という呼び方が用いられています。狐はとりわけ美しい女性に化けるのが得意とされ、村人や旅人を道に迷わせる、馬糞(ばふん)を饅頭だと偽って食べさせる、木の葉を小判だと思込ませて相手をだます、あげくのはてには、池の中に落として溺死させてしまう残酷な話が語り継がれてきました。「狐に化かされた」といったような話が日常的に交わされるほど、その当時の人たちの心に大きく染みついていたといってもよいでしょう。



『江戸名所道戯尽十六 王子の狐(部分)』 個人蔵

石岡市立ふるさと歴史館第44回企画展

石岡の昔話を掘る 其ノ二

— 出没！昔話の妖怪たち —

令和8年4月8日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680番地1

tel:0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社一丁目2番10号

tel:0299-23-2398